

|      |   |
|------|---|
| 開催地名 | 愛知県東郷町  |
| 開催日時 | 令和7年8月30日(土) 10:00～11:30  |
| 開催場所 | 東郷町民会館 2階 大会議室  |
| 語り部  | 池田 雅彰(大阪府吹田市)   |
| 参加者  | 参加者 東郷町内60代～80代の男女55名   |
| 開催経緯 | 大規模災害等被災した経験のない当町にとって、上記参加者を対象に語り部の被災地での経験に基づいた支援に関することや苦勞された点、課題等、講話を聴講することによって防災意識の更なる向上と発災した場合の迅速的確な対処対策に役立てるため。   |
| 内容   | <p>(1) 阪神淡路大震災の教訓による応援体制の変化</p> <p>阪神淡路大震災では、全国から多くの応援が来たものの市町村ごとに個別に被災地へ向かったため指揮系統が統一されず、組織的な活動が難しいという問題があった。これを教訓に、国は都道府県単位で消防隊を編成する「緊急消防援助隊」制度を創設し、災害時には例えば大阪府内の消防本部から隊員が集まって「大阪府大隊」として組織的に派遣されるなど、全国47都道府県で同様の体制が整備された。また、震災時に阪神高速道路の倒壊現場で大渋滞が発生し緊急車両が通行できなかった経験から、現在では災害時に一般車両を規制し、緊急車両が優先的に通行できる仕組みも導入されている。</p> <p>(2) 被災地での市民による自発的な相互扶助</p> <p>阪神淡路大震災では、行政の支援が行き届く前に被災した市民が自発的に協力し合い、食料や調理器具を持ち寄って炊き出しなどを行った。これは防災ボランティア活動の先駆けとなる動きであり、「誰かが号令をかけた」のではなく、「鉄板を持っていく」「鍋を持っていく」といった一人ひとりの意思から始まったもの。応援に入った垂水区の公園でも、当初は着の身着のまま避難していた人々が、1週間後には鉄板や鍋、ガスボンベを持ち寄って焼きそばやおでんなどの温かい食事を作り分け合っていた。消防隊がカップラーメンを食べている横で、被災者自身が温かな食事環境を作り出している姿に深く感銘を受けた。</p> <p>(3) 災害に対する「我がこと意識」の重要性</p> <p>防災において最も大切なのは、災害を自分自身の問題として捉え常に関心を持ち続ける「我がこと意識」。災害への関心は時間の経過とともに薄れやすく、実際に「西日本には地震はない」と思われていた中で阪神淡路大震災が発生したように、災害は予期せぬ場所で起こる。阪神淡路大震災から30年が経ち、当時の記憶や危</p> |

機意識が薄れている今こそ、他の地域での災害を見て「自分ならどうするか」を考えるなど、意識を維持し続けることが求められる。たとえ避難行動が空振りに終わったとしても「空振りは許されるが、見逃しは許されない」という考えを持ち、疑わしい時にはためらわず行動し常に非常事態を想定して備えることが重要である。

#### (4)災害時の「行動のパッケージ化」と警報発令時の具体的行動

災害時に迅速に行動するためには、事前に「この状況のときはこうする」という行動計画を個人で決めておくことが重要です。これにより認知・判断・行動にかかる時間を短縮でき、行政任せではなく市民一人ひとりが主体的に備えることにつながる。例えば大雨警報が出た場合は、まず「心のスイッチをオン」にしてテレビやスマホで情報を集め、懐中電灯を確認して身近に置き、非常持ち出し袋を玄関に出し、ハザードマップで危険箇所や避難経路を再確認するといった一連の行動をセットで行う。特に高齢者や体の不自由な方は、警報が出た時点で避難を開始することが望ましいとされている。

これを徒競走に例えると、事前の備えが「位置について」であり、それがなければ「ヨーイ、ドン」と行動を始めることはできません。懐中電灯や非常持ち出し袋がなければ動けないように、地域のハザードマップの確認や家具の転倒防止、感震ブレーカーの設置などの準備をしておくことが、まさに「位置について」にあたるのです。

#### (5)事例：東日本大震災における緊急消防援助隊の活動

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、自身の緊急消防援助隊・救助隊長としての活動実体験。災害の壮絶さ、出動の緊迫感、過酷な移動、そして被災地の初期状況について。

2011年3月11日14時46分に発災

大阪でも震度3を観測し、緊急消防援助隊の出動命令が下る。話者は救助隊長として隊員4名を指名し計5名で出動。当初の目的地は津波警報が出ていた和歌山県だったが出発直前に関東方面へ、さらに静岡走行中に岩手県釜石市へと目的地が変更された。大阪府隊61台251名が車列を組んで移動。津波警報で通行止めになった東名高速道路を避け、未開通の新名神を走行するなど困難な道のりだった。

3月11日

14:46：地震発生。

20:00：大阪府隊が万博記念公園に集合。

20:44：吹田市救助隊が出発。目的地を和歌山県→関東方面に変更。

|  |  |
|--|--|
|  | <p>静岡県走行中に目的地が岩手県釜石市に決定。</p> <p>3月13日</p> <p>3:00：約30時間、1100kmを走り続け岩手県遠野市に到着。</p> <p>6:30：遠野市を出発し釜石市経由で大槌町へ向かう。</p> <p>9:30：道路が寸断されていたため大槌町の3km手前で降車し徒歩で町へ入った。</p> <p>(6)東日本大震災における救助活動と津波の脅威</p> <p>2011年の東日本大震災で甚大な津波被害を受けた岩手県大槌町（人口約1万5000人）では、町長を含む多くの住民が犠牲となり、避難生活者は6000人、行方不明者は1700人を超えるなど深刻な状況にあった。津波は川を遡上して内陸まで到達し、木造家屋のほとんどが全壊するなど、被害は地震よりも津波によるものが大きかったとされている。</p> <p>この中で大阪からの消防隊は37時間かけて陸路で現地に入り、高校の体育館を拠点に3日間交代制で救助活動を行った。途中、市民からお辞儀で激励を受けるなど交流もあり、隊員の士気向上につながった。</p> <p>一方で、甚大な被害状況（例：「1万人が行方不明」）を隊員に伝える際には心理的影響を考慮する必要がある、また長距離移動による疲労や現地での過酷な生活環境を想定した準備も課題となった。</p> <p>情報が限られる現場では、まず各隊の隊長クラスが集まり、町の人口など断片的な情報を共有し、隊員の士気に配慮しながら「生存者を探す」という共通目標を確立することが活動開始の第一歩となる。</p> <p>(7)熊本地震から学ぶ「本震」への備え</p> <p>2016年4月の熊本地震は、最初の大きな地震が前震であり、その後さらに規模の大きな本震が発生するという特異な事例だった。4月14日21時にマグニチュード6.5、震度6の地震が起き、当初はこれが本震と考えられましたが、2日後の16日午前1時25分にマグニチュード7.3、震度7の本震が発生した。</p> <p>この経験から得られる教訓は、大きな地震が起きても「これで終わり」と油断せず、さらに大きな揺れが続く可能性を常に意識して行動することが重要。</p> <p>実際、震度5程度の揺れを感じた後も安心せず、避難や安全確保の行動を継続する必要がある。また、緊急消防援助隊の派遣においては大阪から熊本まで700kmという長距離移動による隊員の負担を軽減するため、フェリーを利用するなど輸送手段の最適化が図られた。</p> <p>(8)阪神淡路大震災、東日本大震災、能登半島地震から学ぶこと</p> |
|--|--|

阪神淡路大震災、東日本大震災、能登半島地震はいずれも最大震度7を記録したが、被害の様相は大きく異なる。阪神淡路大震災では揺れによる家屋倒壊が中心で、死者6,434人、負傷者約4万人にのぼった。一方、東日本大震災では死者の多くが津波によるもので、負傷者は約6,000人とどまった。

この違いから、我々が住む内陸部では阪神淡路型の直下型地震による被害に備えることの重要性が示されている。町のハザードマップでも想定されているのは、負傷者が多く死者が少ない阪神淡路型の被害であり、日頃から揺れによる倒壊や負傷に対応できる備えが必要である。

#### (9) 建物の耐震基準と揺れの関係

建物の倒壊リスクは、建築時期の耐震基準や地震の揺れの特性（周期）によって大きく左右される。特に震度7の揺れは非常に強力で、昭和57年（1982年）以前の古い耐震基準の木造家屋では約80%が倒壊する一方、新耐震基準で建てられた木造家屋でも約15%が倒壊する可能性がある。また、震度6強と震度7では被害の規模が桁違いであり、1～2秒周期の「キラーパルス」と呼ばれる揺れは、震度が比較的小さくても木造家屋と共振して大きな被害をもたらすことがある。

日頃から自分の家がどの程度の揺れで危険になるかを意識し、震度3程度の揺れでも「これくらい揺れる」と体感的に把握しておくことが、いざという時の判断に役立つ。

#### (10) 災害発生直後の救助と生存率

大規模災害が発生した場合、他の地域からの応援部隊（緊急消防援助隊など）が到着するには通常2～3日かかる。しかし、生存率は時間の経過とともに急速に低下するため、発災直後の行動が極めて重要である。阪神淡路大震災では、発災当日に救出された人の生存率は約80%だったが時間とともに低下した。

実際には救助活動の初期段階は消防や自衛隊ではなく、隣近所の人々による助け合いによって行われていることが多く、大規模災害時には公助だけでは対応しきれないため、地域住民の共助が不可欠である。倒壊家屋の中から助けを求める声が聞こえた場合は、まず目に見える範囲で少ない労力で救助できる人を優先し、奥にいる人は倒壊のリスクや専門技術を考慮して後回しにする、いわゆるトリアージの考え方が重要となる。

#### (11) 家の中の安全対策（家具の転倒防止と閉じ込め対策）

建物が無事でも家具の転倒によって避難経路が塞がれたり、下敷きになって負傷・死亡する危険がある。そのため、事前の対策と万が一の際の対処法を知っておくことが重要になる。家具の転倒を防ぐ最も基本的な対策は、突っ張り棒などで家具を

固定することだが、天井の強度が弱い場所では天井が抜けることがあるため、梁など丈夫な場所に設置する必要がある。

また、寝室では就寝場所にタンスなどが倒れてこないレイアウトを考え、ドア付近には倒れやすい家具を置かないようにすることも大切。もし重いタンスが倒れて人が下敷きになった場合は、無理に持ち上げようとせず、まず裏側の弱い板（ベニヤ板など）を破壊し、中の衣類などをすべてかき出して重量を軽減します。こうすることで持ち上げやすくなるだけでなく、たとえ完全に持ち上げられなくても下敷きの人への圧迫を和らげ、状態の悪化を防ぐことができる。

#### (12) 災害時の心理バイアスと避難行動

災害時、人間には心理的バイアスが働き、客観的な状況判断を妨げて避難行動を遅らせることがある。代表的なものとして、正常性バイアスがあります。

これは「これくらい大丈夫だろう」「まだ大丈夫」と考え、都合の悪い情報を無視したり過小評価したりする心理で、避難が遅れる原因になる。また、同調性バイアスは周囲の行動に合わせることで安心しようとする心理で、「周りが避難していないから自分も大丈夫」と考えてしまうことがある。しかし、こうした心理的バイアスを乗り越え、主体的に行動することで命を守ることができる。実際、東日本大震災の岩手県釜石市では、小中学生が率先して避難したことで多くの命が救われた。地震発生後、校庭に避難していた子どもたちの中で、ある男子中学生が「津波が来るから高いところへ逃げないと」と叫び、その声をきっかけに生徒や大人たちが高台へ避難を開始した。この「釜石の奇跡」と呼ばれる事例は、日頃の防災教育の成果である出来事であった。

#### (13) 稲むらの火の物語と教訓

安政南海地震の際、和歌山県広川町で浜口梧陵は、刈り取ったばかりの稲の束（稲むら）に火をつけ、津波の襲来を村人に知らせた高台へ避難させたという逸話がある。実際には浜口自身も一度津波にのまれたが、命からがら陸にたどり着き、沖で漂流している村人たちが陸の方向を知るための目印として稲むらに火をつけ、先祖の教えに従ってより高い神社へ避難したことで、後から来たさらに大きな津波の被害から逃れることができた。

この物語は戦前の国語教科書に掲載され、「地震の後には津波が来る」という教訓を全国に広めた。その後、浜口梧陵は私財を投じて巨大な堤防を建設し、被災した村人を雇って給料を支払い生活再建の支援をした。完成した堤防を見て梧陵は「これで住民の百年の安心を確保できる」と語り、目先の復旧だけでなく、100年先の未来を見据えた防災の重要性を示した。

|       |   |
|-------|---|
|       | <p>❖宿題と提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の住んでいる地域で大雨が降ったらどうなるか、ハザードマップなどを確認し日頃から考えておくこと。</li> <li>・家具の転倒防止装置や感震ブレーカーなど、自治体が行っている補助制度を調べて活用すること。</li> <li>・日頃から自分が率先して様々なことを考え、行動することを心掛ける。</li> <li>・今日の話（稲むらの火など）を、何かの機会に他の人にも話してみる。</li> </ul>  |
| 開催地より | <p>災害に対する「わがこと意識」をどのように醸成していくか、いつ起こってもおかしくない毎日として意識し、防災・減災のための事前準備と訓練の在り方など、今後の取り組みについて再認識することができた。</p>   |